

## 昼寝同好会部員勧誘

午後の保健室は、暖かな日差しの中、静まり返っていた。鍵が開いたから、留守ではないと思っていたのだけれど。

久しぶりの保健室だった。ほんの数週間前は、毎日のように通っていたというのに。

だけど、こまったな……。勝手に薬をあさるわけにもいかないしなんて考えていたら、ようと声をかけられた。

「どうした？ またか」

ごそごそとベッドから起き上がる気配があったかと思うと、皆守くんが顔をだした。オマエも不健康だなあと言いながら、アロマパイプを取り出している。ルイ先生ならすぐ戻ってくると言って、アロマに火をつけ、目を細めた。

「皆守くんこそ、大丈夫？」

「オマエも、たまには屋上で昼寝なんてどうだ。頭痛薬なんかより、よほど効く」

がりがりとして頭をかきまわした後、皆守くんはそう言って笑った。太陽の光の下、健康的だとか。

「それは気持ちよさそうだね」

「だろう？ 九ちゃんと、今度、布団もってってやるかとか言ってるんだけどな。何なら今からやるか？」

今日はよくはれているし、頭痛も吹っ飛ぶだろう、と。その言葉に、僕は残念だけだと首を横にふった。

「部活で、突き指したみたいなんだ。だから、湿布をもらえないかと思ってきたんだけど」

何だそういうことかと、皆守くんはアロマを吸った。

「つまらん」

「……本当にするなら、教えて欲しいな」

「よし」

これでオマエも共犯者だとか。ええ？ 何で共犯？ 寮のふとんをもってくるとかじゃなくて？

何をする気なのかと尋ねる僕に、ルイちゃんなら職員会議だからそろそろ帰ってくると言って、皆守くんは笑った。